和歌山大学教育学部教育実践指導センター紀要　No.4　1994

英語学習媒体の親近性尺度作成に関する研究

A Study on Making the Scale of Authenticity of
Media between English and A Learner

早　田　武　四　郎（英語教室）
Takeshiro Soda (Department of English)

抄　録

英語と学習者間の媒体（Media）は，イメージの良いものもあれば，良くないものもある。イメージは親近性にも通じる。親近性は必要性と好感性で構成されており，イメージはその中の好感性に合致すると思われる。英語教育においては，媒体のうち，イメージが良く，親近性の高いものを積極的に使うべきである。そして，イメージの良くない，親近性の低いものは使わないか，イメージが良く，親近性の高いものに変える必要がある。それは親近性の高い媒体を付加することによって可能である。すなわち，学習者の英語へのイメージに親近性の高い媒体を加える形になると思われる。親近性の高い媒体を使うと，自動的にそのような作用が働くと解釈できる。本稿は英語と学習者間に存在する媒体の親近性－尺度作成およびその効果について，グループ・ワークのテーマの親近性の作用を通して考察する。

キーワード：英語と学習者間の媒体（media），媒体のイメージ（親近性），親近性＝必要性＋好感性，グループ・ワークのテーマ，学習者の英語へのイメージ

Ⅰ．問題の背景

英語と学習者間には様々な媒体が存在する。その媒体には身近かに感じるものと遠くに感じるものがある。また，操作可能なものと操作不能のものがある。― 親近性を高くすることができるものとできないものがある。―　例えば，教師という媒体である。研修によって，親近性を高くすることができるが，これは，教師が本人である時以外は，すぐには，できないことである。しかし，教師以外の媒体は教師自身が授業を組み立てるとき，教材選択で，親近性の高いものを選ぶことによって可能である。教師は己という重要なメディアをできるだけ親近性の高いものにし，かつ，維持しなければならない。親近性の高い媒体は，筆者の実験によると学習転移性も高い傾向がある。（cf.第１図～第６図）

Ⅱ．研究の経緯

英語授業に並行してグループ・ワークを始めて１１年になる。５～８人の班を編成し４～５のテーマ（無課題を含む）をクジによって分担し，４～６週間の期間を与えて，協同

で調査・研究させると，その後，２週間以内に行われる総合英語テストにおいて，実施群の成績は，無課題群および不参加群のそれに比べて，優れていた。下記の表参照，なお，４月総合英語テストによって実施群と非実施群の等質性を確認している。〔統計の手法[1]はすべて t 検定である。※ s.：有意差あり，－s.：統制群有意，n.s.：有意差なし，.05：5%水準，.01：1%水準，＊＊ 1%水準で実験群有意，## 1%水準で統制群有意〕

第1表 1983～1993年度 ｸﾞﾙｰﾌﾟ・ﾜｰｸ 結果概要

年度	タイトル	被験者数	等質性検定	有意性検定
1983	1)ｲﾗｽﾄ[1]	15(15)	p<.05 -s.	p<.01 s.**
	2)英語の歌	10(10)	n.s.	n.s.
	3)小論文[2]	12(15)	n.s.	n.s.
1984	1)小論文	18(10)	n.s.	p<.01 s.
	2)英語の歌	11(10)	(分散分析)	p<.01 -s.##
1985	1)絵葉書	27(35)	n.s.	n.s.
	2)しおり	36(35)	n.s.	n.s.
	3)和風英語	33(35)	n.s.	n.s.
	4)英会話表現集[3]	31(35)	n.s.	n.s.
				(後定－前定)
1986 (a)	1)デザイン・建築用語[4]	13(13)	n.s.	n.s.
	2)デザイン・建築原書の訳[4]	4(13)	n.s.	n.s.
1986 (b)	1)英会話表現集	15(26)	n.s.	p<.01 s.
	2)ﾀﾞﾙﾝﾄﾋﾞｰ[5]	16(26)	p<.05 -s.	n.s.
	3)英語圏ｶﾞｲﾄﾞ	22(26)	n.s.	n.s.
				(前定－５月テ)
1987	1)小論文	105(77)	p<.05 -s.	p<.01 s.
	2)絵葉書 (大学所在地紹介)	78(77)	n.s.	p<.05 s.
	3)絵葉書 (大学紹介)	38(77)	n.s.	n.s.
1988 (a)	1)小論文	18(22)	n.s.	p<.05 s.
	2)絵葉書 (大学所在地紹介)	32(22)	n.s.	n.s.
	3)英会話表現集	19(22)	n.s.	n.s.
	4)日本の乗用車	15(22)	n.s.	p<.01 s.
	5)英語のｼﾝﾎﾞﾙﾏｰｸ	24(22)	n.s.	p<.05 s.
1988 (b)	1)絵葉書 (大学紹介)	22(20)	n.s.	n.s.
	2)英会話表現集	28(20)	n.s.	p<.01 s.
	3)日本の乗用車	38(20)	n.s.	n.s.
	4)英語のｼﾝﾎﾞﾙﾏｰｸ	27(20)	n.s.	n.s.
1989	1)小論文	34(67)	n.s.	n.s.
	2)絵葉書 (大学所在地紹介)	57(67)	n.s.	p<.05 s.
	3)英会話表現集	34(67)	n.s.	p<.01 s.
	4)日本の乗用車	38(67)	n.s.	n.s.
	5)英語のｼﾝﾎﾞﾙﾏｰｸ	35(67)	n.s.	p<.05 s.
1990	1)絵葉書 (大学所在地紹介)	11(17)	n.s.	n.s.
	2)絵葉書 (大学紹介)	11(17)	n.s.	n.s.
	3)英語のｼﾝﾎﾞﾙﾏｰｸ	6(17)	n.s.	P<.05 s.
	4)小論文	7(17)	n.s.	n.s.
1991	1)絵葉書 (大学紹介)	11(19)	n.s.	n.s.
	2)絵葉書 (大学所在地紹介)	18(19)	n.s.	n.s.
	3)英語のｼﾝﾎﾞﾙﾏｰｸ	21(19)	-s.	n.s.
	4)小論文	19(19)	n.s.	n.s.
1992	1)日米プロ野球	14(40)	n.s.	p<.05 s.
	2)英語のｼﾝﾎﾞﾙﾏｰｸ	18(40)	n.s.	p<.05 s.
	3)しおり (ｷｬﾝﾊﾟｽ動・植物)	11(40)	n.s.	n.s.
	4)小論文	16(40)	n.s.	n.s.
1993	1)日米プロ野球	21(40)	n.s.	p<.01 s.
	2)英語のｼﾝﾎﾞﾙﾏｰｸ	12(40)	-s.	p<.01 s.
	3)絵葉書 (ｷｬﾝﾊﾟｽ動・植物)	17(40)	n.s.	p<.01 s.
	4)小論文	16(40)	n.s.	p<.01 s.

※被験者数欄 () 内は統制群の人数

この原因を考えた時，小集団内の交互作用がまず挙げられる。次にテーマの親近性が考えられる。親近性の中身を分析してみると，必要性か好感性のいずれか，あるいは，両者が重なった形 — どちらかが，その度合が強いと思われる。いずれか強い方を親近度とする — で構成されていると考えられる。そこで，２５０名の学生にアンケートを配布し，１６のグループ・ワークのテーマの親近度について，先述の方法で回答を求めた。その集計結果 — 平均点 — は次の通りである。（仮説１に関する調査）

1.「物語のイラスト化とヒアリング問題の作成」（必要性）：6.4
2.「英語の歌」（好感性）：7.1
3.「大学紹介絵葉書の作成」（好感性）：5.7
4.「大学キャンパス内の動・植物を題材とする‘しおり’の作成」（好感性）：5.7
5.「日本語になった英語」（必要性）：6.8
6.「メイン・テキストその他より重要英会話表現集の作成」（必要性）：7
7.「各専攻にちなむ英語専門用語集の作成」（必要性）：6.6
8.「各専攻にちなむ英語専門書（原書）の訳」（必要性）：7.2
9.「世界の英語国ガイド」（好感性）：6.5
10.「小論文」（必要性）：6.5,
11.「大学所在市（町）紹介の絵葉書の作成」（好感性）：5.6,
12.「日本の乗用車のニックネームの意味と由来を調べる」（好感性）：6.3,
13.「日米プロ野球のニックネームの意味と由来および本拠地（市）の人口，名所，産物，気候等の紹介する」（好感性）：5.9,
14.「世界の英語国におけるメジャーのサッカー・ティームのニックネームの意味と由来および本拠地を調べ紹介する」（好感性）：6.3,
15.「野球用語・英語表現集の作成」（好感性）：5.7,
16.「現在，世界で最もポピュラーなニュー・ミュージック５曲の紹介」（好感性）：7.4

Ⅲ．研究の目的

1）本研究の第１の目的は英語学習媒体の親近性が必要性か好感性，あるいはその両者が重なる形で構成されているかどうかを，学生，約２５０名のアンケート回答により，ほぼ明らかにすることである。　（cf.⑫.）
2）第２の目的は，英語授業に並行して行われるグループ・ワークにおいて，親近性の高いテーマを使った実験群は親近性の低いテーマ（無課題）群より，グループ・ワーク終了後，２週間以内に行われる総合英語テストの成績を向上させるかどうかを明らかにすることである。

Ⅳ．仮　説

1）英語学習媒体の親近性は必要性か好感性あるいは両者が重なる形で構成されている。
2）英語授業に並行するグループ・ワークにおいて，親近性の高いテーマを使った実験群

は低いテーマ（無課題）群より，グループ・ワーク終了後，２週間以内に行われる７月ーまたは２月総合英語テストで成績を向上させる。

〔４月総合英語テストは速読ー，リスニングー，基礎学力ー，クローズ・テストまた，グループ・ワーク終了後，２週間以内に行われる７月ーまたは１２月の総合英語テストは速読，リスニングー，基礎学力ー，クローズ・テスト，テープ・ディクテーション，読解テストで構成されている。なお，出典については注参照（※４月総合英語テストによって両群の等質性を調査する。）〕

Ⅴ．本研究に連なる先行研究の概観

「視聴覚教育は言語によるよりも具体的な経験によって学ばせることから始まった。しかし，最近になり学習において心象（心的イメージ）が重要な役割をしていることが分かってきた。イメージとはある事象について，あたかも絵のように心の中に描きやすい事象は，そうでない事象よりも，はるかに学習しやすいことが明らかになっている。イメージを作りやすい事象とは，たとえば，単語であれば具体語であり，作りにくい事象とは抽象語である。」（今栄国晴，1971）また，Pavio(1971)はCsapoとともに絵，具体語，抽象語を３つの群の被験者に記憶させる実験を行った。各群はそれぞれ，72の絵，単語を１つにつき0.063秒間ずつ，提示された。そして，５分後と１週間後に，意図的な場合と偶発的な場合とに分けて，その記憶の状態を調査した。その結果は第５，６図の通りである。すなわち，５分後も，１週間後も，また意図的な場合，偶発的な場合，いずれも，絵，具体語，抽象語の順で再生率が高かった。この理由として，絵，具体語は絵と言葉による２重痕跡として心象に残るために忘却率が低く，抽象語は言葉による心象しか作用しないので忘却率が高いとする説が唱えられている。

また，Edgar Dale(1954)は，その著，‘Audio－visual Methods in Teaching’の中で，「経験の円錐」なる図を掲げ，人々の様々な経験を，具体性の濃いものから薄い（抽象的な）ものへと段階的に分類している。その図では，直接的・目的的体験が最も具体的なもの，すなわち，最も親近性の高いものとして示されている。

Ⅵ．実　験（仮説２に関する）

１．実験の方法

１）被験者　Ｅ大学　教育学部

１年生	29名	経済学部	１年生	20名
２年生	12名		２年生	28名
３年生	10名		３年生	8名
４年生	3名		４年生	3名
計	54名		計	59名
			総計	113名

2）処遇の配置について，

※処遇 ― グループ・ワークのテーマ ①～⑤ ― 上記113名，18班にランダムに割り当てられた。 （⑤グループ課題を何も与えられない場合）

2．実験材料

4つのテーマともに指定せず，学生の班討議を経た選択に委ねた。教師は必要に応じて相談を受けた。

3．実験の手順

1）各処遇は次のように実施された。

i) グループ・ワーク①～④は平成5年6月一杯を作業期間とし，7月9日（火）は授業時（共に2校時）までに完成作品が提出された。なお，作業期間の途中でグループ・ワークチェック票が参加者全員に配られ，提出作品に添付された。

4．実験の結果

実験の結果は次の表に示す通りである。（cf.第1表，第2表，第3表）

Ⅶ．結 果

第1表，第2表に見るように，実験（グループ・ワーク実施）群は4つのテーマ共に統制（無課題）群に比べて，7月の総合英語テストの成績において優れていた。（但し，4月の総合英語テストでは，ほぼ等質であった。）

Ⅷ．結果の考察

仮説1．「英語学習媒体の親近性の中身は必要性か好感性のいずれかか，その両者が重なった形で構成されている。」は約250名の学生が，アンケート回答の際，何ら疑問を差しはさむことをしなかったこともあり，支持されたのではないかと考えられる。

仮説2．「英語授業に並行して行われるグループ・ワークにおいて，親近性の高いテーマを使った実験群は親近性の低いテーマを使った統制（無課題）群より，7月総合英語テストにおいて優れている。」という仮説は，第1，2表に見るように，支持されたと理解される。

Ⅸ．結 び

英語学習媒体の親近性は必要性か好感性のいずれかか，その両者が重なった形で構成さているとする仮説はほぼ支持されたと考えられる。さらに，親近性の高い媒体を使うことが英語学習に好結果をもたらす傾向があることも，概ね支持されたと理解される。

注

(1)等質性の検定は両側検定，５％水準で統一した。有意性の検定は両側検定を用いた。

参考・引用文献

今栄国晴「学習理論と視聴覚教育」『視聴覚教育の理論と研究』日本放送教育協会　1980,pp.321－328

Dale,Edgar, Audio－visual Methods in Teaching, Revised edition, The Dryden Press, New York,1954, 42－43

Pavio, A., Imagery and Verbal Processes, Holt, Rinehart and Winston,1971

早田武四郎「大学英語教育における‘プロジェクト・ワーク’の試み」『九州英語教育学会紀要』第22号　75－85, 1994

10	10
9	9
8	8
7	7
6	6
5	5
4	4
3	3
2	2
1	1
必要性（N）	好感性（F）

親近性（A）
（　　）← NかFの高い方の得点

第1図　プロジェクト・ワーク　テーマの親近性測定法

学習者

教師　英語
教具（テープ・レコーダー，OHP，ビデオ、黒板、テキスト等）
各種教授法（プロジェクト・ワークを含む）
学習者の英語へのイメージ
学習者間，教師と学習者間の交互作用
etc.

← 低　親近性　高 →

第2図　英語と学習者間のメディア（媒体）

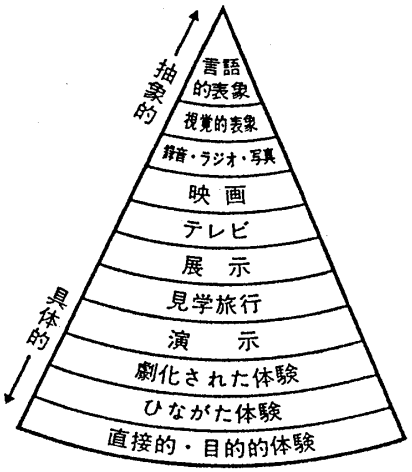
プロジェクト・ワーク
‖
親近性の高い

メディア1 ＋ メディア2
親近性の低い
‖
英語へのイメージ

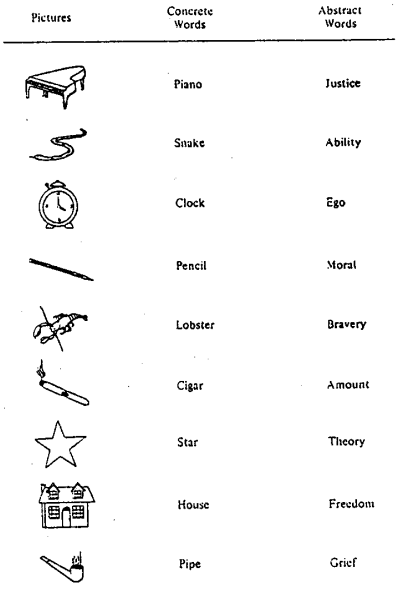
親近性の高い
メディア3
‖
英語へのイメージ

← 低　親近性　高 →

第3図　メディアの親近性増進のメカニズム
（プロジェクト・ワークの効果に関する仮説の概念構成図）

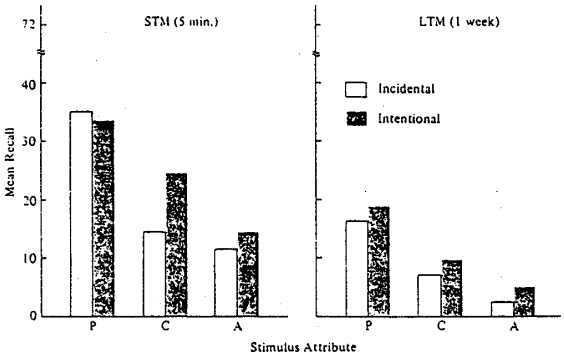


第４図　　デールの経験の円錐体



Pictures	Concrete Words	Abstract Words
	Piano	Justice
	Snake	Ability
	Clock	Ego
	Pencil	Moral
	Lobster	Bravery
	Cigar	Amount
	Star	Theory
	House	Freedom
	Pipe	Grief

第５図　~~FIGURE 7-6.~~ Examples of pictures, concrete nouns, and abstract nouns used as stimulus items in the free recall experiment by Paivio and Csapo.



第６図　Free verbal recall for pictures (P), concrete words (C), and abstract words (A) after different retention intervals and under intentional or incidental learning conditions.

第2表 1993 ４実験群と統制群のSD、平均値
被験者数、４月テスト、７月テスト

実験群	テストの調査の項目 種類	４月テスト	７月テスト
ﾌﾟﾛ野球ﾆｭｰｽﾀｲﾑ	SD	10.3	14.06
	M	61.5	81.4
	N	21	21
	SUM	1292	1709.5
英語のｼﾝﾎﾞﾙ・ﾏｰｸ	SD	9.44	14.37
	M	66.5	84
	N	12	12
	SUM	798	1008
絵葉書	SD	10	8.9
	M	63.05	88.0
	N	17	17
	SUM	1072	1496.5
小論文	SD	14.7	17.3
	M	60.09	84.45
	N	11	11
	SUM	661	929
統制群	SD	8.46	12.71
	M	59.96	70.07
	N	52	52
	SUM	3118	3643.5

SD：標準偏差値、M：平均値、N：被験者数
SUM：総和

第3表 1993 4実験群と統制群間の
t 検定結果、等質性の検定、
有意性の検定

実験群	ﾃｽﾄ項目 ﾃｰﾏ	等質性検定	有意性検定
1	日米ﾌﾟﾛ野球(21名)	0.65 n.s.	3.59 s.**
2	英語のｲﾒｰｼﾞ(12名)	2.32 －s.#	3.29 s.**
3	絵葉書(17名)	1.23 n.s.	5.34 s.**
4	小論文(16名)	0.049 n.s.	3.13 s.**
統制群(40名)		4月ﾃｽﾄ	7月ﾃｽﾄ

* 1％水準で有意差なし、5％水準で有意差あり
**1％水準で有意
\# 1％水準で有意差なし、5％水準で統制群有意